

底うらやましく思える師弟(兄弟?)関係に見えた。月刊むし誌上でしばしば掲載されたエッセイで、高桑さんによる藤田さんと、藤田さんによる高桑さんの描写や掛け合いは、下手な漫才よりもよほど面白くて、いつも爆笑したものだ。そもそもこの二人がいなければ、日本鞘翅学会(=日本鞘翅目学会)だって無かったし、「Elytra」も「さやばね」も存在しなかったのだ。

「牛歩会」というカミキリニュース主催の採集会があった。1976年の第2回牛歩会は、カミキリ屋のメッカだった奥日光、群馬県大沢のみよしやで行われた。虫そっちのけのそれこそハチャメチャな会で、中学生のボクには刺激が強すぎた。メチャクチャだったが、みんな仲良しだった。写真はその時、28歳の高桑さんと13歳の私(写真1)。

ここにもう一つあげた写真は1978年の木曜サロン忘年会の一コマである。毎週木曜日に上野の加賀という喫茶店で開かれていた甲虫屋の集まりで、あのミイロトラが世界で初めて世間?にお披露目されたのもこの場所だった。忘年会の席上で高桑さんの右隣にいるのは1981年に若くして世を去った高桑さんの盟友(麻雀チンチロリン仲間)で採集の天才だった小田義広さん(写真2,左から小宮次郎さん,露木繁雄さん,高桑さん,小田さん,小林敏男さん)。

ボクは1980年代に渡米したので虫屋さんたちのつきあいがしばらく途絶えたが、2000年に新堀豊彦さんを囲む虫仲間の集まりである「夢虫の会」に仲間入りさせていただき、再び高桑さんとの楽しいつきあいが始まった。夢中の会を牽引しているのはやっぱり高桑さんだった(写真3)。

2011年、明治神宮の境内総合調査に委員として高桑さんに加わっていただいたことはボクの誇りである。調査の様子を映像で記録した時、高桑さんに

は絶対に作品に登場して欲しかったので、調査初日にインタビューをした。短い時間ではあるが、2015年に放送されたNHKスペシャル「明治神宮 不思議の森」に高桑さんを登場させられたことはディレクターのボクにとっての喜びだった。でも結果的に明治神宮の番組が、恐らく高桑さんがテレビ映像に登場する最後の姿になってしまった。

8月の終わり、夕暮れの茜色に染まる晩夏の雲を呆然と眺めながら、金沢八景からモノレールに乗って高桑さんがいる病院へ向かった。ベッドの上の高桑さんは恐らく薬のせいで少し朦朧としてはいたけれど、会話はちゃんと成立していたし、別れ際に握った手は本当に力強くて、ボクはもう一度、絶対に高桑さんは復活してくれると妙な確信をもったのだ。でも願いは叶わず、そのわずか5日後に、我が師匠、高桑正敏さんは愛するご家族と多くの仲間を残して逝ってしまった。

高桑さんが旅立った後、ボクは新潟の弥彦神社へ参拝に行き、奥宮のある弥彦山の山頂へケーブルカーで上がった。山頂駅から奥宮への尾根筋はいかにもコブヤハズカミキリ好みの枯れたウドが点在していた。弥彦山のコブヤハズ・・・それは高桑さんが1971年の甲虫ニュースNo.14と月刊むし9号に報告していて、ボクの中ではこれがコブ博士、高桑さん初のコブレポートだと思っている。弥彦山の山頂部でウドの枯れ葉にちょこんと乗った、少し変わった大きな斑紋を持つコブヤハズを目にした瞬間、にこやかな高桑正敏さんの笑顔が弥彦彦の臉の裏に浮かんだ。全然論理的ではないのだけれど、その時なぜか、ボクは高桑さんへの一つの供養をはたしたような気がした(写真4)。

(東京都品川区)

高桑さんとの思い出

大原昌宏

私が高桑さんと初めて会ったのは、高校生の時、科博の新宿分館で行われた甲虫談話会の席だった。遠い親戚にあたる遠藤俊次さんに黒沢良彦先生を紹介していただき、先生から談話会への入会を勧めていただいた。緊張しながら出席した初めての会は、発表内容も参加者も忘れてしまったが、黒沢先生と長竿を背負っていた高桑さんは覚えている。1978年のことである。その後、私は鹿児島大学、北海道大学と進学し、東京を離れたため、高桑さんと再び会うのは大学院生になり甲虫学会(当時は鞘翅目学

会)に毎年出席するようになってからである。

環境省の「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」の前任委員だった上野俊一、森本桂、佐藤正孝の先生方に代り、1995年から、高桑さんと私が甲虫担当の委員となった。これ以降、年に2、3回、委員会や学会で高桑さんにお会いするようになった。高桑さんは既に神奈川県や東京都のレッドデータブック(RDB)種の選定委員などを経験されており、保全活動にも積極的に関わっておられたことから、環境省の甲虫類RDB種選定で

は、高桑さんから多くを教えていただいた。というよりも私がかかなり力不足だったのでいろいろとご心配をおかけした。委員会の後は、近くの居酒屋や東京駅の地下街で一緒に呑ませていただいた。RDBや博物館のいろいろな情報を教えてくださり、昔の甲虫界の虫や人の話も楽しく伺った。環境省が2015年にまとめた「種の保存法」の「特定国内希少野生動植物種」では小笠原産のタマムシ、カミキリ、ハナノミ、15種1亜種が指定されており、高桑さんには全く問い合わせも説明もなかったようで、専門家を差し置いての指定の経緯にはだいぶ憤慨されていた。夜遅くにお電話をいただき話し込んだことをよく覚えている。

高桑さんは、私を虫の世界に誘ってくれた遠藤俊

次さんをよくご存知で同世代であった。娘さんが鹿児島大学に進学されたときも「娘が大原さんの後輩になる、鹿大はどう」と話をしてくれた。お会いするのは委員会や学会がほとんどだが、高桑さんとはいろいろつながりがあり、虫屋の世界は狭いのだけれども、何かそれ以上のものを感じていた。頼りになる相談相手であり、学会でお会いしたときもいろいろと意見を伺い安心をさせていただいた。あまりに急だった高桑さんとのお別れは、すぐには受け入れられないだろう。これから何か相談事ができたとき、高桑さんならどう考えるかを思いだし実感するのだと思う。ご冥福をお祈りする。

(北海道大学総合博物館)

高桑氏を偲んで

大林延夫

去る9月29日、横浜のベイシェラトンホテルで「高桑さんのお別れ会」があった。この日会場一杯にあふれた参会者の多さに、改めて氏の交友の広さと人望を知る事となった。だが僕と高桑さんとの個人的な交流はそれほど多くない。1~2度は彼が我が家に来た事もあって、しかしその時の印象が深かったためか、子供たちは良く覚えていて「サンマのおじさんがテレビに出ていたよ」などと言っていたのを思い出す。

何時の事だったか、彼と「一度中国で虫を採ってみたいね？」等と言う話が出た。「中国は難しいけど、香港だって中国だから、きっと何か虫は採れるんじゃない?」「香港には虫屋の友人の鎌苅さんがいるから案内してくれるかも」「香港なら安いツアーがあるね」とトントン拍子に話がまとまった。記憶は定かでないが「香港5日間4万円?」のツアーに二人で申し込んだ。今、昔の手帳を開

いてみると、成田出発が1986年6月4日17:45で、帰りは8日香港10:05発となっているので実質3日間しかなかった。30年前の事である。

当時商社員として香港に在住していた鎌苅哲二さんが迎えに来てくれたのだが、奥様が退屈しているから今夜は我が家で麻雀に付き合え、との事でそのままお宅に伺い、楽しく遊んでホテルに帰ったのは多分深夜だったのだろう、翌朝ツアーの添乗員にこっぴどく怒られた。彼にしてみれば乗客が初日から行方不明になってしまったのだから、泡を食ったに違いない。

ともあれ香港で採集なんて考えてもみなかった、と言う鎌苅さんの車で虫の採れそうな場所を探す。やがて九龍半島側の大帽山と言う所にポイントを定めて3人で採集開始。思ったより自然が残っていて、樹林の真ん中が幅広く防火帯として切り払われてはいたが結構楽しめた。カミキリでは *Embrikstrandia bimaculata* や *Acalolepta speciosa* 等の美麗種が記憶に残っている。山頂近くの笹原にでると、高桑氏が



写真1. 1986年6月香港にて(左:高桑氏, 右:鎌苅氏)。



写真2. 2014年7月台湾にて(中央:左高桑氏, 右:大林)。